

登山口と改稱致し候處石場所より之御登山は直登山なれば至極輕便なれども先師方之靈場舊跡等を拜する不能因て本年よりは先例により吉田口を以て御登山の事に決定相成候間此段公報に及候也

明治廿七年六月

實行教本館教務所

東海道巡教日誌 (續記)

事去月に屬すこ雖も前號記載漏れの分五月以後の巡迴景況を今作らず師らず茲に記する亦各地の歡待を謝するのみ靜岡縣巡教了へ教長柴田佐平氏に送られて參州豐橋に着せしは四月廿八日の午后なりし神戸教長社員數名を將て先つあり車を備ふて吳服町の自宅に迎へらる、當主三九郎氏は當時上京中に參信鐵道敷設請願の運動中なりといふ二子三子共に米國桑港に在つて各商業練習に熱心せり昨年管長が渡米の折なご大に幹旋の勞をさらしと聞きぬ、廿九、三十兩日滞在休憩す、五月一日遠州敷知郡へ向ふ、蓋し豐川稻荷開帳に會せしと當市に米麥取引所の設立あり、開業式あり町内の雜踏云はん方なく「今度のブルス開業式には藝妓が、二百人計り出て踊りがある」なといふ勢ひ神道演説なご中々聞かん人もなからんとの懸念より俗人顧客の醉夢醒なん後こそよけれといふにありぬ、一先つ發して鷺津より船を續して濱名村岡本に向ふ有名な今切の内濱名湖の風少しく荒れたれども却て舟を行るに適し天のなせる絶景山水の眺めいさ面白く眞帆片帆さては漁船の行きかふさま全幅宛から鑑の如し此夜井口市三郎氏に宿り講筵を開く盛會翌二日郡藥石原貞作氏に行く篤志者來應夜譚復盛なり、三日午后舟に乘して三月日に向ふ千鳥樓休憩二時同地定席に於て公開演說會を開く開場前より群々と集まるもの無慮二百餘小村の事とて耳あるもの目あるもの先は一村の重立者悉く來れりといふ第一席神戸教長管長を廳衆に紹介し次に余は例に依て

神辨粗瀾の演説に只一の熱心と赤誠を以て無事演了し夫れより管長は溫然たる風貌と高雅なる姿態を以て懇切丁寧に米國に於ける神道を演述したるものとて廳衆は只肅然聽聽し了つて喝采の聲屋外に徹せり時將に五時夫れより有志者は千鳥樓上に於て懇親會を開き一行を招聘せり會するもの七十餘名多くは是れ村内有力者にして是迄左まで宗教の必要も認めず選擇の標準をも知らざるの人今や管長の高論を聞き決然大悟皇道の何物たるを知り實行教の俗流を脱して世に所謂宗教なる者其環を異にするを悟りて後主唱盡力したるなり、主唱者は井口市三郎同興會次郎、夏目登、縣身、神服部貫の諸氏にして何れも村民の重きを措く所たり、席定まるや井口與會次郎氏立て開會の趣旨を述へ予は之に答辭をなす、酒三行にして有志は切に留む管長に一の席上演説を蓋し神道德義に關する事を管長は諸君の厚意謝すへしと雖も如何せん疲勞甚しく且つ咽喉を痛めし之故を以て後日を期せんと言はるれども聽かず、切りに人を以て喝す已を得ず管長は揚の中央に起て簡單なる一場の演説をなす滿場拍手を以て之を以て喝采を以て之を賛し夫れより各胸襟を開き清談數刻歡を盡して散會せしは午后九時過なりし岡山の人今は同地に醫を業とする有木仙太郎氏殊に感憤したりと見れば來訪し談論快哉氏父は本社教を奉するの人民の外戚は素と本教を奉せし人なりしとさても緣故はあるものなり其夜天候陰險猛惡の風起る雨亦將に加はらんと言ふ勇氣を鼓して舟二隻を續して東濱名大崎に向ふ舟子力を盡せり一眸茫莫として天暗濤、月あらは如何に此の風景の絶佳ならん又は彼方此方に漁火の輝ける我に詩なきを怨むのみなご語りあふ内早や大崎の汀に着き上陸して歩むと數町當村世話係二橋新太郎氏に着せし頃は夜已に二更、夜半頃より猛雨地軸を徹し夜明けて猶ほ止まんとせす今日の演説如何ならんと言ふ皆空のみ打まもりしが午前十一時の頃風位を變し次第に雨も小ぶりとなり正午に至つ

て雲收まりうら／＼と輝ける日の青く連なりし夢島の名残の雲を照らし
て心地さへす／＼しくなりければ頼て有志者は準備にかり午後三時
より當村小學校に於て演說會を開く來會者頗ふる多く能く聞込みて喝采
聲裡に閉會を告げ二橋氏の宅に於て談話數刻寂に就く時已に九時、翌五
日順風に直帆揚げて湖水を馳せ瀨名の後に豐橋に歸る、蓋し豐橋町公開
演說の計劃成りしに由れり、六日午后二時より吳服町成田座樓上に於て
神道大演說會を開く來聽者堵の如く余の登壇せし頃は早や立錫の地な
りし菅長の熱心なる講演了りて神戸氏に歸るや來訪者引も切らず學校訓
導橋、鈴木、二氏最も熱心なる賛同を表せられ愛知新聞通信員、某氏大
社教、師岡島溫氏等亦來談せらる菅長は終始溫容を以て應接せられ大に
來訪の歡喜する所たり、前號已に報せし如く當地鎮臺分營に於て翌七日
午後六時より神道講話あり軍曹後津氏の幹旋する所與て大に力あり氏は
非常なる國粹主義の人にして夙に神道の腐敗を慨き我實行教の能く時世
と背馳せざるの旨趣に服し神戸氏の紹介にて入會せられ兵營に在て其長
上に喜ばれ其同僚に敬むるに依れり人々も云ひ自身亦喜に不堪といふ鎮臺
に於て神道の講話ありしは今回を以て嚆矢とす東都各新聞にも掲載あり
愉快なる事共なりし、八日夜魚町下田小平方に於て開講比隣皆集まる、
瀧美郡に田原町といふ處あり海中に突出して舊領一萬二千石と記す舊主
三宅家は南朝の烈士備後三郎兒島高德朝臣の末葉にして當時朝臣を奉祀
せる巴江社の祠官即ち當主康寧子なり父君は東京に在て黒住教にありと
殊に嘉すべきは舊藩士大概今猶土着して各職を勤め依然舊態を存して其
君に事ふ、中に楠東岳といへる人職を學校に奉し今回菅長の邀教を聞き
如何にもして一場の演說を乞はんと奔走盡力せられ其結果として一行海
上五里を越へ田原町に驛り先づ巴江社に詣て次で勸王家として熱血家と

して舊伯として有名なる渡邊華山先生の新設の石碑を訪ひ菅長各國詩を
詠して進む(前號所載略)夜に入つて巴江社社務所に於て演說を開く、
者滿場十時了つて旅店木戸三樓に宿す、有志來訪小宴の催しあり、宗教、
神道、米國等の質問百出應答談論風生し雲起り散會せしは翌午前一時頃
なりし當夜來訪者重立ちしもの村上照武(舊家老)、山本春次郎、向井伊蔵
土井禮(學校々長)、中村義上、森田福四郎(神官)、楠東岳、廣中康次郎(郵
便局長)等の諸氏なりし、十日豐橋神戸等に歸り同夜同家の祖靈祭を執行
す十一日夜同町絹屋德三郎氏方夜講盛會翌十二日午前十時出立瀧車にて
遠州掛川町青島泰氏一泊夜講、十三日島田町淺沼謙次郎氏方一泊夜講盛
會同氏は此圓を機とし家に養子を迎へ決然本館教務所に入り大に斯道に
盡されんとを誓はれ共に上京せられたり翌十四日藤枝梅屋に一泊教長櫻
井氏偶然來り會せらる志太郡岡部村萩原平右衛門氏方に於て月並會の催
しあり池田彦兵衛氏の招きにより予は參會一場の演說をなし翌十五日停
瀧車新橋に着せし頃は雲名残なく收まりていさ心地よき空合となりぬ四
十餘日の此行記すへき事録すへきもの一にして足らずと雖も非文章をな
さす且つ紙面を費やすの恐れあれば茲に筆を擱かんか花は上野に盛りな
る折立出てし一行が今は目に青葉涼しきも早やすきて衣更にて團扇手に
する頃となりぬ世の中はさて／＼變るものかなと只管感に堪へず

(隨行員塵外手記)

近刊雜書

●世界の大詩人

基督教書類會社發行

井上活泉道人、カイスラエルの詩人ダビデが身卑賤より起りてサウロ王に